
ETERNITY

フィリップ谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ETERNITY

【Nコード】

N6301Y

【作者名】

フィリップ谷

【あらすじ】

四大企業がすべてを統治する近未来世界。ナノマシン群体と第七世代人工知能によって構成される特殊兵器「ディフェンダー」を駆使して戦う傭兵や企業私兵を養成する聖ヨハネ騎士団学園に、運動神経ゼロ・わがままボデイの少年が入学してくることになった。少年は学園の調査部が長年に渡って探し続けてきた、？片方の羽根？だというのが……。

前書き

読者各位

このたびは、
本ページを開いてくださり、
まことに、
ありがとうございます。

実は、どうしてもお読み頂くまえにお断りしなければならぬことがあって、前書きを設けさせていただきました。

結論から申し上げますと、この作品をここに書き散らす目的は、筆者の自己満足以外のなにものでもない、ということであります。

物語には始まりがあれば終わりがあつたもので、完結しない話は物語とは言いません。

したがって、こういう場において連載を始めるからには、きつちりと終わらせるのが、作者の、読者に対して負うべき責任であり、また礼儀だろうと思います。

しかしながら、本作品の筆者はこのことを読者の皆様に対して、お約束いたしかねます。

要するに、嫌になつたら途中で放り出す、ということでもあります。どころか、出来が気に入らなければ丸ごと削除することもあります。

またエンターテイメント作品には基本のスタイルというものがあり、公募に出す際にはこの様式をきつちりと遵守し、その枠内で出来る限り面白いものを書くことで腕前を見てもらうという、暗黙の

了解のようなものがあります。

この様式のあり方には案外多様性がなく、単行本程度のルールブックに集約できると思います。これは小説を数年書いていれば誰でも知ることができます。

このルール群は詰まるところ、整っていてストレスなく読めるものを書くための、ひとつの様式に過ぎないのですが、どうもこの規格に適合しない作品はためであるという認定をされがちです。

そして実際だめなことが多いです（笑）

結局、守って書くのが無難なのではありません。が、あいにく筆者は、この規格を守って書くのが嫌になりました。

それは守るだけの力量がないからであり、守って書いていても楽しくなくなってきたからでもあります。

ここで、もうひとつ、お断りをしなければなりません。

本作品は、小説の一般的なかたちに適合しないという意味で、相당한駄作になると思います。

もっと端的に言うと、筆者は自分のツボに正直に、好き勝手書かせてもらうつもりである、ということです。

もうひとつ。

筆者はこの作品を、小説を書き始めたころに戻ったつもりで、（大まかなラインは念頭に置きつつも、基本は）行き当たりばったりに書いていこうと考えています。

広げた風呂敷をきっちり畳むということ（それはつまり物語に起承転結をつけることを意味する）を、最大の目的としません。

広げたら広げっぱなし、ということも多発するかと思います。

ここまでお読みになった方には言うまでもないことですが、本作品は、書き手は楽しいけれど、読まされるほうはたまったものではない、という代物になる可能性大です。いや、必ずそうなります。

そんなのはチラシの裏にでも書いておけというお叱りはごもつと
もですが、せっかくこういう場があるので、そんなチラシの裏でも
覗いてやろうじゃないかという奇特な方がいらっしゃらないとも限
りませんので、

あえて！

筆者の自己満足を書き散らしてみたいと思います。

このような次第でありますから、読者各位におかれましては、本
作品を華麗にスルーしてくださいるか、さもなければ、（初っ端から
こんなことをくのたまう>筆者がもしご不快でなければ）ひとつお
付き合いくださいますよう、宜しくお願い申し上げます。

尚、本作品に登場する人名・地名・団体名等は、実在のそれ等と
は一切関係がありません。

2011年11月吉日 筆者

プロローグ 01

白、白、白……

強烈な光のなかを、淡い影のかかった白衣が行き来している。衣擦れの音や、サンダルがリノリウムをこする特徴的な音が、単調に続いていった。

目をあげれば、ラウンジの壁にはめ込まれた大型のテレビに、背広の男が映っている。かれはニュースを読み上げていた。そこにはさつきまで、片方の羽根しかもたない哀れな天使が写っていた。

天使は、失ったもうひとつの羽根を捜して旅をしていた。そういう筋書きの短い映画だった。

天使は錆付いた戦車が放置され、瓦礫の散らばる戦場跡を、彷徨う。悲しみに暮れる人々のあいだを、呆然として歩くのである。天使はあどけない顔をしていた。怯えながら廃墟を歩くそのすがたに神々しいところはなく、表情ははつきりと悲しみに曇っていた。

ミカはこの天使に言いようのない親しみと懐かしさを抱いた。どこかで会ったことがあるような、そして、彼の探しているもう一方の羽根が、まさに自分の背中にあるような気がしていた。

天使がミカを探しているように、ミカも天使を探している。そんな奇妙な感覚がずっと拭えなかった。

（私は……ここに……）
そう呼びかけようとしても、ミカは声をあげることができなかった。

ナースステーションの硝子に淡くうつる自分の姿は酷かった。細い体の半分以上を包帯で包まれ、車椅子にぐったりと坐っていた。呼吸をするたび、心臓が鼓動を刻むたびに、脇に据え付けられた生命維持装置が冷たい電子音を鳴らす。

（私は……ここに……）
ミカは手を伸ばす。その腕には幾つものチューブが差し込まれて

いた。けれどもかの女は、失望してはいなかった。むしろ、ばらばらだったふたつの羽根が会合うときを予感して、心にほんのりと温かいものを感じていた。

（彼は……きつとここにくる……）

白いひかりが揺れている。

鎮痛剤の作用で、ばらばらにされた体に痛みはなかった。かわりに、ぞつとするような冷たい倦怠感があった。そこに落ちたら二度と目覚めることのないような、冷たい眠気が襲ってくる。

（怖い……）

ミカは、声にならない声をあげた。そうして、ゆっくりと眼を瞑った。

ブローグ 02

最上雅春は舌打ちをして、彼岸過迄を図書室のテーブルに伏せた。辺りは寂然としている。

遠くから、エーデルワイスの伴奏と斉唱がぼんやりと聞こえてきた。

雅春は溜息をついて、席を立ち、窓辺に立った。そうして、真昼の太陽に輝く大都市のビル群をしばらくあてもなく眺めた。近頃、ゆつくりと読書ができない。

それは時間的・空間的な制約からではなかった。いつでも学科の授業など抜け出せるし、事実、いまこうしている。今頃おなじクラスの中は、黒板に書き出された三角関数と格闘しているはずであった。

ゆつくりと読書ができないのは、かれを取り巻く様々な問題が、すこし複雑になってきたためだった。

頭をすっきりさせるつもりでここへやってきて、小説をひらくのに、ふと気づけば諸々の問題のことを考え込んでしまっている。

いまもそうだった。

あの紺野ミカが実戦訓練中に瀕死の重傷を負い、いまも生死の境を彷徨っていることは、雅春にとって未だに認めることのできない失敗だった。

ふたたび舌打ちをし、窓枠に拳を軽く叩きつけたとき、図書室のドアが無遠慮に開かれた。

雅春が振り返ると、そこにはパンツスーツ姿の美しい女が立っていた。

女は、おまえを探すのに手間取ったんだぞというように軽く顎先をあげ、テーブルにつく。そうして、座れとばかりに、向かいの椅子を指さした。

「調査部が見つけ出したようだ、？もう一方の羽根？」を」

女は、雅春が席につくなり、長い黒髪をかきあげながら、そう言った。

雅春は薄い唇の端に皮肉っぽい笑みを浮かべ、

「羽根だつて？ その表現、陳腐すぎて笑えるな」

「老人どもがそう呼んでいるのを借用しただけだ」と、女は言い訳がましく言う。そうして無人の図書室を見渡して、「……相変わらず授業をサボっているのか」

「？ あいつは食み出しものだ？ っていう評判がどうしても必要なんだよ。好きでサボってる訳じゃない」

「どうだか。……こっちは、おまえが学業不振だと叱られるんだ。ちゃんとやってくれ」

「だから企業お抱えのガーディアンになんかなるもんじゃないって言っただろう？」

「おまえも似たようなものじゃないか。霧島の出資でこの学園にいるのだからな」

「一緒にしないでくれよ。あんたは社畜。俺はこんなところいつでも辞められる」

「ほう、言っじゃないか。いまさら霧島のデیفエンダーを捨てようものなら、それを聞きつけた連中が大挙しておまえを殺しに来るぞ。お互い敵が多いのだから、気をつけないとな」

女はニヤリとする。雅春は鼻を鳴らして、

「……で、？ もう一方の羽根？ はどのチームに配属させられるんだ？」

「言うまでもない」

「北朝の息がかかったところに、か」

雅春が呟くと、女は首をかしげた。「北朝？」

「そうか、あんた知らないのか。生徒の間じゃあ、新生徒会をそう呼んでるんだ」

「ほう。で、いままでの生徒会は？」

「北朝とくれば、分かるだろ。南朝だ。どっちにも一応の力と正当

性があるからな、生徒たちはいずれが本当の、偽の、という風には言えないんだ」

女は、なるほどという表情を浮かべ、

「それにしても、理事会の決定をもって白黒つける訳にはいかないのか」

「無理だ。あんたも知っているだろう。南朝の背後にはパーミックス（Pacific Rim Military Industrial Complex）、北朝の背後には九竜公社がついている。アフリカや中南米の代理戦争と構図はほとんどおなじなんだよ。で、霧島はどうするんだ。勝ち馬九龍に乗るのが、落ち目のパーミックスに肩入れして恩を売るのか」

「そのいずれでもない」と、女は言った。「少なくとも、今のところは、な。で、おまえの希望はどっちなんだ？ 上に伝えておくぞ」「どうでもいいが、方針をころころ変えるのだけはやめてくれと言っておいてくれ。こっちは状況に合わせてどうとでも動く。こたわりはないよ。……で、仮に、だけど……」

雅春は顎に手をあてる。女は眼を細めた。

「仮に？」

「俺が？ もう一方の羽根？ を手元に置いておきたいと言ったら、上は嫌がると思う？」

「だろうな」と女は言った。「霧島はいずれの陣営にも肩入れしないが、さりとて表立って敵対することも望んでいない」

「しかし、羽根のテスト・ユーザーとしての利用価値は決して少ない筈だけど？」

女は苦笑いを浮かべた。「……分かった。開発部の役員に働きかけてみよう。で、羽根を手元に置いてどうするつもりだ」

「そこまでは考えていない。けれど、黙って北朝に預けるのも面白くないからな……」

雅春はすこし俯いて言った。介入を躊躇ったために、紺野ミカは重傷を負ったのである。

「おまえは案外、そういうところがあるのだよな」女はどこことなく
楽しそうに言った。「まあ、おまえが指導担当になるのなら、文句
は出ないだろう。それに、それが本人のためかもしれない」

女は、近いうちに連絡すると言い、淡い香水の匂いを残して、席
を立っていった。

ブログ 03

「うおー、ふざけんなっつう話です!」

逢坂聖人が二〇四一年三月二十八日付で自身のブログに書き綴った文章は、右の言葉から始まる。

おやじがね、昨夜、デロンデロンに酔っ払って帰ってきたんです。おやじは半導体メーカーの法人営業部に勤める、ごく普通のリーマンです。

接待とかあるから、デロンデロンに酔って帰ってくるのは珍しいんですよ。

でもね、その日に限って、なんかね、様子がおかしい。

次の人事異動で、取締役営業本部長に抜擢されることが内定したとかなんとか、喚いてるんです。おやじ主任だから、そりやもう、嘘みたいな大出世ですよ。で、お母さんは大喜びで、赤飯炊くとか言い出してるし、役員になると豪華な社宅があてがわれるらしくて、妹たちはパンフレットをひろげて部屋割りの話でもりあがってるんです。

俺、風呂からあがってそんなリビングの風景を見て、へへーよかったねーと、軽く言っつて、部屋に引き取ろうとしたら、おやじがね、待て、そこに座れって言っんです。

「お前、ゲームクリエイターになるのが夢なんだったな」

酔った眼を俺にむけて、親父が言う。

「まあね」

そんなのもう何度も話し合ったじゃんとばかりに、俺は言いました。とりあえず普通科の高校を出たら専門学校に行き、ゲーム会社に就職する、大学にはいかない。そういう話で落ち着いているんです。

次の瞬間、気まずそうに脇を向いたおやじの口からとんでもない

言葉が出てきました。

「諦める」

我が耳を疑いました。

だって、そうでしょう？ ハア？ ですよ。子供にむかって夢を諦めるなんて親、存在していいんですか？ ねえ、そんな親アリですか？

「おまえは傭兵になるんだ いや、嫌ならなくてもいいんだ、警備員になっても構わない。が、とにかく傭兵？種の養成課程だけは修了してもらわなきゃならん」

「ヨーハイツシュ？」

なんのことか、すぐにはわからなかった。それで鸚鵡返しをする
と、おやじはあれだと言い、テレビにむかってあごをしゃくった。
そこにはアフリカの小国のクーデターをたったひとりで阻止する
という嘘のような武勇伝を誇る少女の、砂にまみれた、けれど美しい
横顔が映っていた。

テロップを読んでみる。

熱烈大陸。日出ずる国からやってきたジャンヌダルクの、戦いの
流儀とは。提供、人類の明日を創造する、サヴォイア・インベスト
メント。 なにかのドキュメント番組らしい。

「知らねーつつーの……」

「嘘をつけ」とおやじは言った。「いまをときめく無双少女・野宮
美穂を、おまえが知らないはずはない。最先端のディフェンダーと
ともに、反政府軍の大隊をひとりで壊滅させてしまっ、しかもこれ
だけの美貌だ。お父さん知ってるぞ、このガーディアン少女、そ
の手のマニアの間じゃ、大人気だそうじゃないか」

それは俺もよく知っているが、知らねーっていうのは、話の進展
についていけないことからくる一種の拒絶感から出てきた嘆き、魂
の嘆きだ。なのに、いちいち説明されても困るんだよ。しかしおや
じはそんな俺の気持ちを知る由もなく、続ける。

「お父さん、ちょうどおまえくらいの歳にね、こんな可愛らしい無

双少女が登場するゲームでよく遊んだもんだよ。おまえはツイてる。ゲームを創る側じゃなくて、ゲーム的世界の主人公になれるんだから！」

なんだその強引な理屈は。確かに混沌とした国際情勢のなか、デイフェンダーを頼りに戦いの日々を送るのは、ゲーム的かもしれない。しかし、それはゲームじゃなく、リアルだ。要するに戦争に駆出されるってことじゃないか……。

おやじは悪魔的な微笑を浮かべて、

「あの少女もかつて在学していた学園に、おまえは進学するんだよ。どうだ、ワクワクしないか？」

「しない！ とにかく、いやだ！ 俺はゲームクリエイターになりたいのであって、ゲーム的世界で生死の境をさまよい歩くつもりはないの！ そんな学園には行かないから！」

すると親父は溜息をつき、

「けどね、そういう訳にはいかないんだよ。お父さん、先方さんに約束しちゃったから」

「つまり、俺が、その学園に行くってことを？」

おやじはこくつと頷いて、

「……そのなんだ、おまえくらいの歳になれば、なあ、わかるだろう？ 勤め人として、どうしても断れないことって、やっぱ、あるんだよね……空氣的に、さ」

俺はそこでやっと、ピンときたんです。

「おやじ……俺を売ったのか？ 実の息子を、出世のために、売り飛ばしたのか？」

おやじは遠い目をして、こう答えました。

「だってさ、親会社の重役さんがつれてきた、その学園のひとがね、どうしてもおまえのことが必要だっていうんだよ。……しかたないだろう」

その返事に、むらむらと怒りが湧き起こってきました。

「ちくしょー！ 親父なんか大嫌いだ！」

俺は思わず叫び声をあげると、部屋にもどって鍵をしめ、枕に顔をうずめてわんわん泣きました。わんわん泣きました。大事なことになるので二度言いました。

どれくらい、泣いていただろう。

そうだ家出をしよう。

心に固く誓って、枕から顔をあげ、俺は準備のために部屋を出た。そしたら、ベランダへのサッシが開けっ放しになっていて、カーテンの裾がゆらゆら揺れてました。

ちよつと覗いてみたら、おやじがむせび泣きながら、タバコを吸っていました。

ごめん、聖人。ほんとうに、ごめん。

俺はしばらくおやじの様子を見守ってから、一抹の諦めを胸に、そつと部屋にもどりました。

けれども、いまでも少し苦しいです。だって俺、結構^{ガチ}本気で、ゲームクリエイターになりたかったから。

暗く濁った空からぱらつく小雨が、窓に水滴を散らす。

最上雅春は自室のソファにもたれながら、刻々と模様を変える窓のしずくをぼんやりと眺めていた。

野宮美穂の携帯の留守電に、ヒマが出来たらすぐに連絡をよこせというメッセージを残してから、二時間が経っている。

苛立ちはピークに達しつつあった。

雅春は手をのばして硬式の記念ボールを取ると、打ちっ放しの壁に思い切り投げつけた。フローリングに大きくバウンドしたボールは、パズルの摩天楼にあたり、ピースが湿気た音をたてて散らばった。

雅春はしばらく、倒れたパズルを見つめていたが、やがて片付けるつもりで立ち上がったとき、携帯電話が鳴った。

スタンドから取り上げて、耳にあてる。

「遅えよ」

『ごーめんごめん、大統領官邸の晩餐会に呼ばれちゃってさ。ねーねー聞いて。あたし、きんぴかの勲章貰っちゃった！それから、記者会見で質問攻めにあって、いまやっと体があいたの！初キスの年齢を聞く記者とかいるんだよ？信じらんない？』

美穂は嬉々として喋りつづける。雅春は溜息をつき、パズルの枠を起こした。

『そうだ！あのさ、テレビ見てくれた？あたし可愛く映ってた？』

「アホか……」雅春は冷然と呟き、「アイドル気取ってんじゃねーよ。おまえは傭兵なんだ。仕事を済ませて報酬を受け取ったら、さっさと帰ってこい。自分の置かれてる立場がまだわかんねーのか？」少しの沈黙があった。

『……ひどい。あたしだって、頑張ってるんだよ。少しくらい褒め

てくれたっていいじゃん』

「いいか、よく聞け。当分のあいだは姿を晦ませるんだ。知らない奴からの面会の申し入れは一切断れ。取材もだ。おまえは目立ち過ぎなんだよ。なあ、おまえを消したがつてる奴は大勢いる……わかるだろ？ 頼むからこれ以上……」

美穂はとつぜん遮って、

『雅春のバーカ！ もう二度とあんたに電話なんてしないから！』

「お、おい、美穂！」

呼びかけたときには通話は切れていた。

突然、雨脚が強まる。その騒音に、近頃癖のようになってしまった雅春の舌打ちが掻き消された。

イケメンなのに彼女ができないヤツには、それなりの理由がある。幼馴染の雅春を見ていると、美穂はつくづくそう思う。

美穂はもういちど、携帯電話にむかって（バカ……）と呟く。（あたしだって、いつまでも子供じゃないんだから……）

姿見のまえでパーティ・ドレスを脱ぎ、下着だけになってホテルのベッドに横たわる。そうして五秒も呆然していると、華やかな大統領官邸のパーティーの雰囲気は消えて、戦場の怒号や砲声、土煙や硝煙の匂いが脳裏に蘇った。

焼け爛れた戦車から火達磨になって降りてきた、若い黒人の兵士が、美穂に向けた、恐怖に歪みきった眼は、きつと一生忘れることができないだろう。

（あたし、なにやってんだろ……）

そんなことを、ふと思う。

銀行の口座には、スラムで生活していた頃には想像もつかなかったほどの大金がうなっている。あらゆるメディアが、自分の一挙手一投足にカメラを向けている。大企業や政府の要人が、驚くほど腰を低くして自分に接してくれる。

どうせ生きるなら、太く短くがいいと、美穂は思っている。

お洒落をして、高い服を着て、みんなの注目を浴びて、なにが悪い。それで死ぬことになるなら、運命なのだから、仕方ない。

もっと素直に言うなら やってられない。

けれど、雅春は昔から違う。甘いところがない。威張ってるけど、いつも冷静で、みんなが生き延びることを第一に考える。そういう少年だった。

いつからか、美穂はそんな雅春に特別な感情を抱くようになった。けれども雅春が自分に抱く感情は、すこし違っていた。それがときにくすぐったく、またときにはじれたい。いまのように、鬱陶し

いこともある。

（アイドル気取ってんじゃねーよ、か……）

うっさい、と美穂はうなって、枕を天井に投げつけた。

自分だって素人ではない。目立てば狙われることくらい、分かっている。けれど、自分がどうしてそうせざるを得ないのか、雅春は考えようとしてくれない。

（バカ……）

美穂はもういちど呟くと、身を起こして旅行かばんを開き、シャネルのワンピースを取り出した。貧民街で生まれた女の子には、体を売っても一生着ることのできない、高価な服だ。それを美穂は着ることができる。

（あたしは打ち上げ花火みたいな一生でいいんだもん……）

美穂はワンピースを身につけると、香水を振って、ホテルの部屋を出た。

「あれから、着信拒否られてる……。くそ、あのバカ女……」

雅春は碁笥に指をさしこみ、石を碁盤に打ち下ろした。

「ほう、そこ切ってくるか。だいぶイラついてんな、おまえ？」

司馬孝典はしばらく盤を眺めたあと、喧嘩には乗らないとばかりに離れたところへ白を置いた。

囲碁部の部室に、春の午後のうらかな光が差し込む。

雅春は茶を啜って、

「しょうがねえから、チケットと休暇を取ったよ。つい訳で、明後日からむこうへ行ってるから、悪いけどそのあいだ、よろしく頼むよ」

「聞いてるぞ。？もう一方の羽根？がお前んところに入ってくるんだってな。……わかった」

「助かる」

「野宮によろしく」

「あー……あともう一つ、頼みがあるんだ」

雅春は思い出したように言いながら、碁石を盤におろす。

「なんだ」

「占ってくんねえか。どうも、嫌な予感がするんだよ」

司馬は黙って碁を打つ。

「ケチんなって。おまえの占い、けっこう当たるからな。いいだろ？」

「占いは信じてないんじゃないのか」

「まあ、な」「雅春は頭をかく。「けれど、とりあえず無事って出てくれたら、今夜はゆっくり眠れそな気がするんだ」

「……十円玉、三枚あるか」

雅春は財布から硬貨を取り出して、司馬に手渡した。司馬は眼鏡をはずして盤の脇に置くと、隣の机にタオル地のハンカチを広げ、

そのうえにパラパラと硬貨を落とした。

おなじ動作を何度かくりかえしたあと、

「……今日は何日だったっけな」

「四月六日」

司馬はしばらく黙り込み、

「……所詮は占いだ。外れることもある」

雅春は顔をしかめた。「凶、か……」

「今晚、十九時から二十一時のあいだは、携帯を傍に置いておいた
ほうが いいかもしれん。……念のためだ」

「……」

雅春の眼前で、司馬は長い間、ハンカチの上の硬貨を見つめていた。

ノーフューチャー？ 01

逢坂聖人は無駄な抵抗をしない主義である。自分の周りを見渡せば（たとえば元氣のないおやじ。それからおやじの出世を喜ぶ母親。加えて、引越しを夢見る妹たち）、聖ヨハネ騎士団学園への入学は避けられない運命と見るよりほかはない。ならば、いつそ適応して、そこから新しく視界がひらけはしないか、やってみるのも悪くないかもしれない。

彼は基本的にポジティブである。

聖人は数日かけてゆっくりと、クリエイター・モードに入っていたマインドをソルジャー・モードに切り替えようと努めた。

まず葉隠を読み、それから五輪の書を読み、俺はサムライなんだ、飢えた狼なんだ、キレたナイフなんだと自己暗示をかけた。

彼は精神論から入るタイプである。

そうして、友人から、

「最近おまえ目付き悪くなったんじゃないの？ 不機嫌なブタって感じだなオイ（笑）」

などと（酷いことを）言われるまで、闘争心に砥石を当てていったのである。その一方で、混沌たる世界情勢の水面下で跳梁跋扈するガーディアンなる戦士たちの実態や、聖ヨハネ騎士団学園なる時代錯誤もいいところの名を冠したミッション系まがいの学校のことを、詳しい友人を捕まえて根掘り葉掘り尋ねたり、ネットで調べたりした。

その結果、彼のマインドは早くも挫けた。

まず学園の一年生のうち半数が、米軍のブート・キャンプ並みの訓練に根をあげて自ら退学の道を選ぶという事実に当たった。かれらはそもそも、ガーディアンにあこがれ、また先天的にディフェンダーを操りうると認められて入学してくるのである。夢を持ち、そして夢を実現させる素質を持っている 青少年にとって、これ以

上の喜びがあるだろうか。にもかかわらず、彼らは辞めていく。

その？新兵訓練？とやらって、

（どれだけ厳しいんだって話じゃないか……）

聖人は暗澹とせざるを得ない。

悪いことに、肥満体型の聖人は、運動をまったくもって苦手としているのである。

それに加えて、一年生の下半期から二年生にかけての死傷率が、恐ろしく高い。一年生の後半になると本格的な実戦訓練が始まるらしいのだが、実戦だけにへたをすれば大怪我を負う。ひどい場合には死ぬ。そうして三年生になると、死傷率はぐぐつと下がる。三年まで生き延びたということは、一流のガーディアン候補生として認められたに等しい。卒業生は四大企業や各地の軍閥などから引く手あまたである。プロ野球選手の卵もビツクリするくらいの契約金を提示されることさえあるらしい。その代表例がかの野宮美穂である。彼女は在学中に四大企業のひとつサヴォイア・インベストメントと契約し、一等地に豪邸が建つくらいの契約金を手にしたという。羨ましい話である。

が、そんな一握りの成功例の一方で、命を落としたり、一生の障害を背負って学園を離脱する生徒が大量にいるのである。いくら聖人がポジティブといっても、限度がある。

それでも、頑張り次第では成功できるんじゃないか。野宮美穂のような、可愛くてカッコいい女の子たちとイチヤイチャしながら楽しい未来を送ることもあるかもしれない。毎晩ベッドにあがると、彼は妄想にふけておのれを奮い立たせた。

（負けちゃだめだ、逃げちゃだめだ、俺！）

そんなある日のこと。朝の食卓で、おやじがなぜか気まずそうに脇に置いた朝刊を手にとって、聖人は、もうダメだというくらいマインドを挫けさせた。

見出しにはこうあった。

「テレビ出演などで著名なガーディアン野宮美穂さん、自爆テロ

に巻き込まれて即死か」

孤児院出身の野宮さんは現地の福祉状況に強い関心を持ち、休暇にたびたび孤児院を訪れていた。ひとりの少女と抱擁を交わしたとき、少女の身体に巻きつけられていたプラスチック爆弾が爆発し、

聖人は、手が震えるのをどうすることもできなかった。

それだけに、聖ヨハネ騎士団学園から届いた書類のなかに、
（新入生は入学式前日までに入寮を済ませること）

の一節を見たときには、戦々恐々とせざるを得なかった。

入学式は四月十一日で、部屋のカレンダーを見れば今日はすでに
九日である。

午前中一杯かけて、ダンボールに生活用品や着替えを詰め、近所
のコンビニにもって行って発送の手続きを済ませ、それから母親に
軽自動車で駅まで送ってもらい、電車に乗り込んだ。

四月の麗らかな陽光が車内を明るくしている。窓のむこうには、
河川敷の桜並木が薄桃色のはなびらを土手に敷き、そのうえで花見
をしている人たちの姿がよく見渡せた。

昼間からビールを飲み、どんちゃん騒ぎをする人々を見ると、
溜息を禁じえなかった。

「けっ、あいつらしい気なもんだぜ」

ソルジャーのマインドをいっしょうけんめい確立しようとしている
聖人は、そんなことを二ヒルに言い捨て、ずるずるとシートにだ
らしなく座って脚を組んだ。そうして、オレはワルだと言わんばか
りに、売店で買った禁煙パイポをすーはー言いながら吹かしてみる。
一端の傭兵になったつもりで空あくびをし、（ほぼ無人の車内で）
かったりーぜ的な空気を醸し出しているうち、ふと斜め向かいにシ
ョートヘアの可愛い女の子が座っていることに気がついた。

気づくなり、急に自分の振る舞いが恥ずかしくなって、パイポに
ふたをしてチェックのシャツのポケットにしまい、膝を揃えて座り
なおした。

そのとき女の子が、ふと聖人を横目に見て、小ばかにしたような
笑みを浮かべた　　ような気がした。

三時過ぎになってようやく電車が学園のある風宮市のホームに入

ると、聖人はバッグを肩にかけて電車を下りた。そうして、はす向かいに座っていた女の子の勝気そうな横顔が、人ごみのなかに混じっているのを、なんとなく目に留めた。

駅のロータリーに出て、どのバスに乗ればいいのか、さっそく迷って、泣きそうになりながらバス停の案内を読んでまわっているうち、立体歩道を挟んだむこうに、さっきの女の子のすがたを見つけた。やがて聖人は、女の子の傍のバス亭に、目的地の名前を見出した。

ホッとして、女の子の後ろにならぶ。と、突然、女の子が振り返って、

「けっ！ あいつらしい気なもんだぜ！」

と言って、からかうような笑みを浮かべた。

「きつ、聞いてたの！？」

「君、まさかと思うけど、聖ヨハネ騎士団学園に入学するひと、とかじゃないよね？」

「その、まさかです……」

女の子は、不思議そうに首をかしげる。

「君……入試会場にいなかったと思うんだけど」

聖人はこくつと頷いて、

「なんかね、特別枠みたい。ほんとうはあんな軍隊みたいな学校行きたくなかったんだけどさ、おやじの仕事の都合で、行かなくちゃならなくなっただけ……」

いきなり女の子はのけぞって、まるで恐ろしいものでも見るように聖人を見つめる。

「あのー……」

「君、もしかして特待生？」

「えっと……」聖人は学園から届いた封筒のなかに、そんな言葉があったような気がした。けれど、まさか自分がそうだと思わなかったので、黙っていた。

「調査部のひとにスカウトされて入学が決まったの？」

確かおやじがそんなことを言っていたし、思えば三日くらいまえ、スーツ姿のひとが家に来て、両親に挨拶をしていたような気がする。そのひとが置いていった名刺には、たしか、「財団法人聖ヨハネ騎士団学園、調査部課長」と書いてあった。

だとすると……

「うん……そう、かも」

「やっぱり特待生じゃん！」と、女の子は興奮したように言う。「すっげー！ 入って見かけによらないんだね！ 君、どう見たってダメキャラなのに……」

「……………」

聖人は頭を掻いた。たしかに、駅ビルの硝子にうつすらと映る自分のすがたは、めがねをかけてソフマップの紙袋でも持ったら、まるで某巨大掲示板に（煽りの意味で）よく貼り付けられるアスキーアートそのものだ。

「あつ、あたし金原さやか。今年から学園の傭兵？ 種養成過程の一年生。よろしく！」

「あ……俺、逢坂聖人です。こちらこそ……………」

ぎこちない笑顔を浮かべて、応じてみるが、細身できらきらとしているさやかと、一枚のウィンドウと一緒に映ってみると、そのあまりの違いに、摂理の残酷さを思わずにはいられなかった。

ノーフューチャー？ 02（後書き）

とりあえず二万文字書いてみてお気に入り登録がゼロなら続きはチ
ラシの裏にしときます。。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6301y/>

ETERNITY

2011年11月26日20時46分発行